

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18320045
 研究課題名（和文） 日本文学における国際的研究理論と互換システム構築をめざして
 ー文化表象を中心に
 研究課題名（英文） “TOWARD FOR CONSTRUCTING INTERNATIONAL STUDY THEORY AND
 INTERCHANGEABILITY SYSTEM IN JAPANESE LITERATURE
 - FROM CULTURAL REPRESENTATION - ”
 研究代表者
 中川 成美（NAKAGAWA SHIGEMI）
 立命館大学・文学部・教授
 研究者番号：70198034

研究成果の概要：

研究成果として日本文学・文化に関する基礎的検索データ構築のための、北米英語圏約 1000 名の日本文学研究者リスト、及び 3630 件の著作論文データ収集、さらに立命館大学における 3 回の国際シンポジウム（2007 年 6 月「イタリア観の一世紀」、同年 12 月「国際乱歩コンファレンス」、2009 年 3 月「東南アジアとの通路」）の開催を本研究の成果とする。その詳細は本研究プロジェクトHP 上において一般に公開されている。

参照：<http://www.ritsumei.ac.jp/~nakagawa/>

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2007 年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2008 年度	6,400,000	1,920,000	8,320,000
年度			
年度			
総計	15,400,000	4,620,000	20,020,000

研究分野：文学一般(含文学論・比較文学)・西洋古典, 国文学

科研費の分科・細目：人文学・文学

キーワード：(1) 文化理論 (2) 文学 (3) 視覚性 (4) カジュアル・ステイーズ
 (5) ナショナル・アイデンティティー (6) ポストコロニアル (7) 映画 (8) ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

現在、世界大規模で広がる日本研究の成果は様々な領域でその効果を発揮しているが、一方に日本における「日本研究」が自明のこととなり、それらの趨勢と乖離して進行する状況も否めない事実として現出している。広領域に拡散し、日本研究の名の下に恣意的に膨張をする地域研究の一環として実体を喪

失した研究状況も問題として浮上している。こうした研究状況の欠損を補修し、各種の研究を繋げていく試みとして本研究は創案された。なお、本研究は 2004～2006 年にかけて行われた科学研究費補助金 C「日本文学における国際的データベース構築に関する基礎的研究」(課題番号 16520119、研究代表：中川成美)の活動内容を継承・発展するものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は日本文化・文学研究に関する国際的理論の構築、およびその交換をめざして、その交差点としての場所の創出と、基礎的検索データの提供・構築、また情報交換、基盤的研究環境の方法的なアプローチをめざすことにある。そのため国内・国外を越境する日本文学研究の現状を広く渉猟することが求められた。具体的には各国研究者及び著作論文のリストの作成、さらに情報交換の場としての各種ワーキングテーブル・研究会の開催を行うことが計画された。

その中でも特に日本文化・文学研究者の基礎的検索データの収集と共に、その中心的な作業として、昨今もっとも注目されている「視覚性 Visuality」に焦点を定め、文学、アニメ、まんが、映画などの領域に亘る日本文学・文化における「視覚性」の問題に焦点をあて、日本文学・文化研究の互換・交換システムの方法論的構築について探査・考察した。本研究は以上のように(1)「日本文化・文学研究者の基礎的検索データの収集」、(2)「日本文学・文化研究の「視覚性」を中心とする研究方法の国際的互換・交換システム構築」を目的とするものである。

3. 研究の方法

グローバルな日本文化・文学研究の現状を把握するために、本研究は研究分担者の協力のもとに、特に北米圏の日本文化・日本文学研究講座を開設している各大学の研究者情報・文献資料データをインターネット・各種文献等によって収集した。同じく海外研究者との交流と相互の研究理論の互換を目指して、各種ワーキングテーブル・研究会が設定され様々な研究発表が行われた。

特に本研究分担者を中心にした「国際研究理論システム研究会」によって開催された研究会「視覚性と日本文学」全5回の研究成果は、日本文学・文化の「視覚性」への研究アプローチについて重要な考察を与えるものとなり、これらの継続的な研究によって国内外を包括した日本文化・文学研究の基礎的研究データが蓄積されることとなった。

【主な研究会の開催状況】

・《第1回「国際理論システム」研究会》
開催日時：2006年7月29日
於：立命館大学（衣笠キャンパス）

・《第2回「国際理論システム」研究会》
開催日時：2007年2月26日～27日
於：立命館大学（衣笠キャンパス）

・《第3回「国際理論システム」研究会》
開催日時：2007年7月29日～30日
於：立命館大学（衣笠キャンパス）

・《第4回「国際理論システム」研究会》
開催日時：2008年1月27日
於：立命館大学（衣笠キャンパス）

・《第5回「国際理論システム」研究会》
開催日時：2008年5月11日
於：立命館大学（衣笠キャンパス）

4. 研究成果

研究成果として日本文学・文化に関する国際的研究を収集する基礎的検索データ構築における、主に北米英語圏を中心とした、約1000名の日本文学研究リスト、及び3630件の著作論文基礎データ収集を挙げることができる。さらにこれらの研究データを活用して、本研究分担者の協力によって立命館大学を開催地として3回の国際シンポジウム（2007年6月「イタリア観の一世紀」、同年12月「国際乱歩コンファレンス」、2009年3月「東南アジアとの通路」）が行われた。特に「国際乱歩コンファレンス」においては、本研究の主要な問題である日本文学・文化における「視覚性」の視点から、これまでにない江戸川乱歩研究への国際的研究アプローチが共同して可能となった。以上のように、これらシンポジウムにおけるヨーロッパ・北米・アジアの日本文学・文学研究者による最新の研究発表と情報交換を本研究の成果とすることができる。その実施は以下の通りである（またこれらの報告は本研究プロジェクトHP上においても一般に公開されている）。
参照：<http://www.ritsumeit.ac.jp/~nakagawa/>

【国際シンポジウムの開催状況】

・《イタリア観の一世紀》
開催日時：2007年6月29日～30日
於：立命館大学（衣笠キャンパス）

・《国際乱歩コンファレンス》
「江戸川乱歩とグローバル文化としてのモダニズム 視覚性と日本文学」
開催日時：2007年12月9日～10日
於：立命館大学（衣笠キャンパス）

・《東南アジアとの通路》
開催日時：2009年3月14～15日
於：立命館大学（衣笠キャンパス）

上記のベースとする研究会開催の他の事業として、海外研究者のレクチャーによる研究

会、講演会、貴重マニユスクリプトのデジタル化、貴重一次資料の発掘、海外にある日本文化・文学関係資料の情報調査がある。前者では研究協力者のトム・ラマール、リヴィア・モネらの招聘があり、後者には貴司山治資料の日記 55 冊のデジタル化が完成している。今後の課題として日本文学・文化テキストの保存とともに、「視覚性」を中心とする個別の具体的テキストの分析が浮上した。現在、北米を中心に日本プロレタリア文学研究がさかんとなっているが、貴司山治資料はいずれ重要な位置を占めていくものと思われる。

ほかに立命館大学所蔵資料を用いた「視覚性」に関する国際共同研究として山田美妙資料の翻刻、デジタル化が図書館、国際言語文化研究所の共同事業として一部、完成しているが、これをもとにした積極的な研究交換が既に開始している。当該分野に関する研究者のデータベースを基にして、共同研究の可能性について今後も追及していきたいと考える。

本研究の終了にあたって新たに要請されてきたのは、海外研究者と日本研究者をやわらかに繋ぐ「場所」の必要性である。「やわらか」と断るのは、リジッドに研究目的を設定するのではなく、可変的に組み替えられる研究共同体のベースキャンプともいうべき機関が今必要ではないかと思えるからである。これは現在世界に拡散する日本文学・文化研究の第一次資料の発掘・発見がプランゲ文庫などの一部の例を除いて、遅れているからである。特に 20 世紀資料については手付かずの状態が、北米、ヨーロッパ、アジアでも散見される。

研究理論の相互の参加による構築についても、こうした日々の具体的な情報の互換・交換、例えば新資料の発掘や解説、翻刻にともなう研究情報の交換によって生じる具体的な考察を基礎として、ともに一次資料情報や、デジタル資料を共有して、各々の場所から探査し、それを関係諸機関や研究者に伝播させていくときの、センターともなるべきシステム（場所）が必要ではないかと考えている。本研究費受給期間にあつてこの研究プロジェクトがささやかながらわずかにそうした機能の一部を当該研究領域において果たしたとするなら最大の喜びである。研究費給付の感謝をここに記したい。

個々の研究を確かに保全しながら、世界大規模の研究システムに連鎖させていったとき、日本文学・文化研究はあらたな段階に一步を踏み出していくと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 17 件)

中川成美、「"視覚という<盲目>-多和田葉子『旅をする裸の眼』の言語的転回」、『立命館大学』、600号、41-50頁、2006年、(査読)有

中村三春、「反啓蒙の弁証法-表象の可能性について」、『国語と国文学』、83巻11号、81-92頁、2006年、(査読)有

花崎育代、「核戦争の危機を訴える文学者の声明」と大岡昇平」、『日本文学』、55巻11号、57-66頁、2006年、(査読)有

中川成美、「在欧知識人の軌跡」、『立命館言語文化研究』、19巻3号、9-18頁、2008年、(査読)有

西成彦、「遺された手紙」、『立命館言語文化研究』、19巻3号、87-90頁、2008年、(査読)有

菅聡子、「瀬沼夏葉とロシア ふいと大きな自由がえたくなりますのです」、『文化表象を読む ジェンダー研究の現在(お茶の水女子大学 21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」成果報告ジャーナル) 1号、22-32頁、2008年、(査読)有

菅聡子「林京子の上海・女たちの路地 アジュールの幻想」、『立命館言語文化研究』、19巻3号、61-70頁、2008年、(査読)有

木村一信、「坊っちゃん」論」、『Dari Botchan sampai Kalong Taman Firdaus』、1号、11-19頁、2007年、(査読)有

中村三春、「モダニスト久野豊彦の様式意味から強度へ」、『山形大学人文学部研究年報』、5号、1-25頁、2008年、(査読)有

西成彦、「Frontiers and Borderlands of Japanese (language)Literature」, in The Proceedings of the East Asian-South American Comparative Literature Workshop 2007, Institute for International Understanding, Tezukayama Gakuin University, 2008, 103-119. (査読)有

小嶋菜温子、「東アジアの漢文文化圏」雑感 韓国への二五年をふりかえりつつ」、『アジア遊学』、114号、91-97頁、2008年、(査読)無

小嶋菜温子、「幻の「源氏物語絵巻」をもとめて パーク本との出会い」、『立教大学大学院日本文学論叢』、8号、2-4頁、2008年、(査読)無

小嶋菜温子、「幻の「源氏物語絵巻」、宴の光と影 スペンサー本「帚木」・パーク本「賢木」断簡にみる」、『季刊iichiko』、100号、65-80頁、2008年、(査読)無

中村三春、「永遠の遅延・ガラス越しのkiss 『また逢う日まで』のメロドラマ原理」、『國文學 解釈と教材の研究』、53巻17号、42-51頁、2008年、(査読)有

菅聡子、「<スキャンダル>としての女 遠藤周作文学における女性像をめぐるささやかなノート」、『叙説3』、第3期3号、22-30頁、2008年、(査読)有

安藤宏、「一人称の近代」、『文学』、9巻5号、32~45頁、2008年、(査読)有

〔学会発表〕(計 11件)

西成彦、「外地の日本語文学 を越えて」、『国際研究理論システム研究会』、2007年2月26日、立命館大学

中村三春、「表象のパラドックス」、『国際研究理論システム研究会』、2007年2月26日、立命館大学

中川成美、「須賀敦子の霧と光 見ることと書くことと」、『シンポジウム「イタリア観の一世紀 旅と知と美」』、2007年6月30日、立命館大学

中村三春、「モダニスト久野豊彦の様式」、『様式史研究会 第49回研究会』、2007年9月、山形大学

中村三春、「久野豊彦とダグラス経済学」、『2007年度 日本比較文学会東北大会』、2007年12月1日、山形テルサ

大嶋仁、「作家の海外体験」、『国際研究理論システム研究会』、2008年1月27日、立命館大学

中川成美、「顔貌性の神話 ジェンダー偏差と暴力」、『東アジア学術総合研究所 公開ワークショップ』、2009年2月14日、二松学舎大学

村田裕和、「交差する詩精神 - 中野重治と萩原恭次郎 -」、『中野重治 研究と講演の会』

没後二十九年、2008年11月22日、跡見女子大学

中村三春、「根源的互換 研究理論の更新のために」、『国際ワークショップ「日本文化研究理論の互換・交換は可能か?」』、立命館大学国際言語文化研究所、2008年12月12日、立命館大学

富田美香、「戦前日本における映画検閲 <民族>と<残酷>」報告、『Censure, Autocensure et Tabous』、QUATRIÈME COLLOQUE D ÉTUDES JAPONAISES DE L UNIVERSITÉ DE STRASBOURG、2009年3月20日

小嶋菜温子、「幻の「源氏物語絵巻」をもとめて」、『物語研究会』、2008年6月21日、東京

〔図書〕(計 13件)

西成彦、インパクト出版『文学史を読みかえる 第8巻』(共著)、2007年、404頁(44-68頁)

木村一信 / 西成彦ほか、世界思想社、『<外地>日本語文学論』(共著)、2007年、307頁(西:31-46頁、木村:218-235頁)

西成彦、作品社、『エクストラテリトリアル / 移動文学論』(単著)、2008年、346頁、

木村一信、双文社出版、『不安に生きる文学誌 - 森鷗外から中上健次まで -』(単著)、2008年、295頁

谷川恵一、平凡社、『歴史の文体 小説のすがた : 明治期における言説の再編成』(単著)、2008年、364頁、

中川成美、新曜社、『モダニティの想像力 文学と視覚性』(単著)、2009年、387頁

中川成美、紀伊国屋書店、『多喜二の視点から見た身体 地域 教育』(共著)、2009年、387頁(52-60頁)

谷川恵一、岩波書店、『明治名作集 (新日本古典文学大系 明治編30)』(共著・校注)、2009年、491頁(1-139頁、441-443頁)

菅聡子、明治書院、『少女小説「ワンダーランド」 明治から平成まで』(共著)、2008年、173頁(5-23頁)

小嶋菜温子 / 中川成美ほか、森話社、『源

氏物語と江戸文化 可視化される雅俗』(共著) 2008年、427頁(小嶋:279-283頁、中川:347-354頁)

小嶋菜温子、勉誠出版、『チェスター・ピーティ・ライブラリ所蔵 竹取物語絵巻』(共著) 2008年、204頁(1-5頁、23-26頁)

米村みゆき、ゆまに書房、『コレクション・モダン都市文化 第39巻 漫画』(編集・共著) 2008年、748頁(689-697頁)

米村みゆき、森話社、『ジブリの森へ 増補版 高畑勲・宮崎駿を読む』(編集・共著) 2008年、311頁(16-57頁、256-281頁)

6. 研究組織

(1)研究代表者

中川成美 (NAKAGAWA SHIGEMI)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号:70198034

(2)研究分担者

西成彦 (NISHI MASAHIKO)
立命館大学・先端総合学術研究科・教授
研究者番号:40172621

中村三春 (NKAMURA MIHARU)
北海道大学・文学部・教授
研究者番号:80164341

大嶋仁 (OOSHIMA HITOSHI)
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号:90135218

菅聡子 (KAN SATOKO)
お茶の水女子大学・文学部・教授
研究者番号:70224871

木村一信 (KIMURA KAZUAKI)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号:20105365

小嶋菜温子 (KOJIMA NAKO)
立教大学・文学部・教授
研究者番号:50204441
瀧本和成 (TAKIMOTO KAZUNARI)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号:10259450

谷川恵一 (TANIKAWA KEIICHI)
国文学研究資料館・教授
研究者番号:10171836

チャールズ・フォックス (CHARLES FOX)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号:90207308

富田美香 (TOMITA MIKA)
立命館大学・映像学部・教授
研究者番号:30330004

赤間亮 (AKAMA RYOU)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号:7021 2412

安藤宏 (ANDOU HIROSHI)
東京大学・文学部・准教授
研究者番号:30193113

花崎育代 (HANAZAKI IKUYO)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号:00259186

彦坂佳宣 (HIKOSAKA YOSHINOBU)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号:00111237

種田和加子 (TANEDA WAKAKO)
藤女子大学・文学部・教授
研究者番号:90171868

中村秀之 (NAKAMURA HIDEYUKI)
立教大学・現代心理学部・教授
研究者番号:00299025

米村みゆき (YONEMURA MIYUKI)
甲南女子大学・文学部・講師
研究者番号:80351758

村田裕和 (MURATA HIROKAZU)
立命館大学・文学部・助教
研究者番号:10449530

(3)連携研究者

Thomas Lamrre
(Professor/ Montreal University)

Livia Monnet
(Professor / Montreal University)